语言学论丛

现代日语形容词词组研究

現代日本語における[redacted]形容詞的な連語についての研究

周彤 著

北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

语言学论丛

现代日语形容词词组研究

現代日本語における形容詞的な連語についての研究

周 彤 著

阜阳师范学院图书馆
藏书

北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

现代日语形容词词组研究/周彤著.—北京：北京大学出版社，2012.12

(语言学论丛)

ISBN 978-7-301-21604-0

Ⅰ.①现… Ⅱ.①周… Ⅲ.①日语—短语—研究 Ⅳ.①H364.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 281334 号

书　　名：现代日语形容词词组研究

著作责任者：周　彤　著

责 任 编 辑：兰　婷

标 准 书 号：ISBN 978-7-301-21604-0/H·3180

出 版 发 行：北京大学出版社

地　　址：北京市海淀区成府路 205 号　100871

网　　址：http://www.pup.cn　新浪官方微博：@北京大学出版社

电 子 信 箱：lanting371@163.com

电　　话：邮购部 62752015　发行部 62750672　编辑部 62759634

出版部 62754962

印　刷　者：三河市欣欣印刷有限公司

经　销　者：新华书店

890 毫米×1240 毫米　A5　8.625 印张　210 千字

2012 年 12 月第 1 版　2012 年 12 月第 1 次印刷

定　　价：28.00 元

未经许可，不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

版权所有，侵权必究

举报电话：010-62752024　电子信箱：fd@pup.pku.edu.cn

本项研究获得以下项目的资助，谨致谢忱！
2009 年度教育部人文社科研究青年基金项目
(09YJC40003)
中央高校基本科研业务费专项资金
(FRF-TP-11-004B)
北京科技大学冶金工程研究院基础理论研究基金
(YJ2010-027)

序

日本的语言学家从事日语词组学（連語論）研究始于上个世纪50年代，这个领域的研究主要是由以奥田靖雄（本名“布村政雄”）先生（1919—2002）为领军人物的语言学研究会这个民间学术团体的成员开展起来的，在这个过程中奥田先生起了主导作用，其中也不无俄罗斯（苏联）语言学的影响。

对于日语中的「連語」（词组）这个术语，言人人殊，迄今学者之间尚未达成共识。语言学研究会的成员所研究的「連語」是指两个或两个以上的实词的组合，而且其构成要素之间的关系必须是向心结构的，其中一个要素是主导词（主導語、カザラレ），另外一个或两个要素是从属词（従属語、カザリ），从属词在语法上和语义上都是依附于主导词。词组学主要研究从属词如何在语义上对主导词进行限定的，主导词和从属词之间都有哪些语义关系类型，而且它们构成一个什么样的体系。

以往的日语词组学研究主要集中在以动词为主导词的动词词组和以名词为主导词的名词词组上，其成果主要见诸以奥田靖雄为主要作者的『日本語文法・連語論（資料編）』（むぎ書房、1983）和铃木康之先生及其弟子的相关论著中。但是，对于以形容词为主导词的形容词词组的研究，问津者甚少，且无系统而深入的研究，周彤的《现代日语形容词词组研究》是对日语词组研究的一个重要的补充。

《现代日语形容词词组研究》是周彤在博士学位论文的基础上修改扩充而成的，其独创性是显而易见的：首先，该书根据主导词与从属词之间的关系清晰地建构了日语形容词词组的体系（附录的「むすびつきの一覧」能够帮助我们一目了然地看清日语形容词词组的全貌），而且该书摆脱了以往动词词组研究中将「ガ格」名词与动词的组合排除在研究对象之外的束缚，将「ガ格」名词与形容词的组合纳入考察的范围，并成功地对其语义关系类型进行了分析；其次，在对关系类型的把握上也没有生搬硬套动词词组和名词词组的研究成果，而是有所突破，比如「成立関与のむすびつき」这一关系类型的确立就很有见地；再次，该研究以描写为主，

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

定性分析辅以定量分析，并运用认知语言学的理论进行解释，而且始终把握住「時間的限定性」「評価性」这两个因子进行阐释，每章后面对关系类型的总结更是起到了画龙点睛的作用。

可以说，周彤的《现代日语形容词词组研究》对于日语词组学的研究做出了贡献。我们经常听到这样一种观点：在日语本体研究上，我们外国人不可能有所作为或有较大的突破，无论如何也研究不过日本的学者，对此本人不敢苟同。只要课题选准了，研究方法科学合理，加上持之以衡的努力，同样是可以有所建树的，本书就是一个明证。日本的日语词组学研究权威、大东文化大学名誉教授铃木康之先生曾经对于周彤的博士论文给予高度的评价。周彤的博士学位论文不仅获得了北京大学优秀博士学位论文三等奖，而且她能够在毕业后很快就申请到“教育部人文社科研究青年基金项目”和“中央高校基本科研业务费专项资金项目”，这些都是对其研究成果的一种肯定。日本的著名学术刊物曾经邀请她撰稿，足以证明其研究得到了广泛的认可。我也曾经多次亲耳听到日本的著名学者发自肺腑地对她称赞有加，作为她的导师，我感到无比的欣慰，青出于蓝而胜于蓝，为人师者，夫复何求。

衷心地期待周彤能够在今后的学术研究中取得更加辉煌的成就。

彭广陆

2012年10月12日于京郊寓所牛步居

目　次

第１章　はじめに …… 1
1.1　本研究の目的 …… 1
1.2　先行研究の流れについての概観 …… 2
1.2.1　現代日本語の形容詞についての研究 …… 2
1.2.2　現代日本語における連語論の研究 …… 3
1.2.3　現代日本語における格の研究 …… 5
1.3　先行研究における問題点 …… 7
1.3.1　格の研究について …… 7
1.3.2　連語論研究について …… 9
1.3.2.1　むすびつきについて …… 9
1.3.2.2　ガ格名詞について …… 15
1.3.2.3　類義表現について …… 18
1.3.2.4　用語について …… 20
1.4　本研究の構成 …… 21

第２章　本研究の枠組み …… 23
2.1　方法論 …… 23
2.1.1　記述における基本的な立場 …… 23
2.1.2　むすびつき一般化の原則 …… 24
2.1.3　「連語」という文法単位の再確認 …… 25
2.2　考察対象についての限定 …… 26
2.2.1　主導語について …… 26
2.2.2　従属名詞について …… 28
2.3　資料と凡例の説明 …… 29
2.3.1　資料 …… 29

2.3.2　凡例 …… 29

第３章　ガ格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 30
3.1　成立関与のむすびつき …… 31
3.1.1　主体目当てのむすびつき …… 31
3.1.1.1　属性の主体のむすびつき …… 32
3.1.1.2　評価の主体のむすびつき …… 35
3.1.1.3　態度・感情の主体のむすびつき …… 38
3.1.1.4　関係の主体のむすびつき …… 39
3.1.2　対象目当てのむすびつき …… 42
3.1.2.1　感情・感覚の対象のむすびつき …… 42
3.1.2.2　能力の対象のむすびつき …… 44
3.2　状況規定のむすびつき …… 45
3.3　まとめ …… 47

第４章　ニ格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 48
4.1　成立関与のむすびつき …… 49
4.1.1　対象目当てのむすびつき …… 49
4.1.1.1　態度のむすびつき …… 50
4.1.1.2　特質のむすびつき …… 81
4.1.1.3　判断・評価のむすびつき …… 90
4.1.1.4　「対象目当てのむすびつき」のまとめ …… 105
4.1.2　主体目当てのむすびつき …… 106
4.1.2.1　感情経験のむすびつき …… 106
4.1.2.2　感覚体験のむすびつき …… 108
4.1.2.3　「主体目当てのむすびつき」のまとめ …… 111
4.1.3　関係づけのむすびつき …… 111
4.1.3.1　距離関係 …… 112
4.1.3.2　類似関係 …… 120
4.1.3.3　類縁関係 …… 122

4.1.3.4　人間関係 …… 123
4.1.3.5　相応関係 …… 124
4.1.3.6　「関係付けのむすびつき」のまとめ …… 129
4.1.4　存在のむすびつき …… 129
4.1.4.1　外在のむすびつき …… 131
4.1.4.2　内在のむすびつき …… 136
4.1.4.3　所有のむすびつき …… 142
4.1.4.4　「存在のむすびつき」のまとめ …… 148
4.2　状況規定のむすびつき …… 149
4.2.1　内容規定のむすびつき …… 149
4.2.2　範囲規定のむすびつき …… 152
4.2.3　原因規定のむすびつき …… 155
4.2.4　時間規定のむすびつき …… 157
4.3　本章のまとめ …… 158

第5章　ト格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 160
5.1　成立関与のむすびつき …… 161
5.1.1　同異関係 …… 161
5.1.1.1　同一性のむすびつき …… 161
5.1.1.2　相異性のむすびつき …… 167
5.1.1.3　類似性のむすびつき …… 169
5.1.1.4　「同異関係」のまとめ …… 170
5.1.2　類縁関係 …… 171
5.1.3　人間関係 …… 174
5.1.4　相応関係 …… 177
5.1.5　位置関係 …… 178
5.2　状況規定のむすびつき …… 181
5.2.1　内容規定のむすびつき …… 181
5.3　本章のまとめ …… 182

第６章　デ格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 183
6.1　成立関与のむすびつき …… 184
6.1.1　充満状態のむすびつき …… 184
6.2　状況規定のむすびつき …… 187
6.2.1　原因規定のむすびつき …… 187
6.2.2　範囲規定のむすびつき …… 201
6.2.2.1　社会的範囲 …… 201
6.2.2.2　時間的範囲 …… 205
6.2.2.3　事柄的範囲 …… 206
6.2.2.4　「範囲規定のむすびつき」のまとめ …… 207
6.2.3　条件規定のむすびつき …… 207
6.2.4　手段規定のむすびつき …… 209
6.2.5　空間規定のむすびつき …… 212
6.3　本章のまとめ …… 213

第７章　カラ格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 215
7.1　成立関与のむすびつき …… 216
7.1.1　距離関係 …… 216
7.1.1.1　空間的距離 …… 216
7.1.1.2　抽象的距離 …… 218
7.1.1.3　事態的距離 …… 220
7.1.1.4　「距離関係」のまとめ …… 221
7.1.2　離脱状態のむすびつき …… 222
7.1.3　状態出現のむすびつき …… 223
7.2　状況規定のむすびつき …… 224
7.2.1　起点規定のむすびつき …… 224
7.2.1.1　空間的な起点 …… 225
7.2.1.2　時間的な起点 …… 226
7.2.2　原因規定のむすびつき …… 229
7.2.3　根拠規定のむすびつき …… 232

7.3　本章のまとめ …… 233

第8章　マデ格の名詞と形容詞との組み合わせ …… 235
8.1　成立関与のむすびつき …… 235
8.1.1　位置関係 …… 235
8.2　状況規定のむすびつき …… 236
8.2.1　終点規定のむすびつき …… 236
8.3　本章のまとめ …… 239

第9章　おわりに …… 240
9.1　本研究のまとめ …… 240
9.2　今後の課題と展望 …… 241
9.2.1　今後の課題・その一 —— paradigmatic観点の連語論研究 …… 241
9.2.2　今後の課題・その二 —— 多義形容詞の意味記述 …… 241

出典一覧 …… 243
参考文献 …… 247
付録　むすびつきの一覧 …… 257
后记 …… 262

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第１章　はじめに

1.1　本研究の目的

本研究でいう「連語」というのは、名付け的な意味を表す実質的な単語と単語との組み合わせである。連語を対象とする研究分野は連語論というが、文法論における連語論の位置づけについて、彭(2004a：9)では以下のように指摘している[1]。

文法論 ｛ 形態論
　　連語論
　　構文論(文論)

文法論が「形態論～連語論～構文論」の３つのレベルに分けられるとすれば、従来、形容詞に関する研究は、形態論及び構文論のレベルで行われたものが圧倒的に多く、連語論の立場から見た形容詞に関する体系的な研究はまだ不十分であると言える。また、連語論研究を一般的に見ても、名詞と動詞、或いは名詞と名詞との組み合わせを中心に展開されているのが現状である。したがって、形容詞研究から言っても、連語論一般から言っても、名詞と形容詞の組み合わせを連語論的観点から研究することは必要な試みであると思われる。

本研究は、連語論の枠組みにおいて、研究の立ち遅れが大きかった名詞と形容詞の組み合わせについて、体系的に記述しようとするものである。本研究の具体的な目標は以下のようにまとめられる。

1　従来の連語論では、いわゆる「従属的なむすびつき」を表す連語しか取り扱わず、「並列的なむすびつき」や「相互依存的なむすびつき(陳述的なむすびつき)」は対象外とされている。彭(2004a)では、このような範囲限定の必要性に疑問を投げ、「すべての単語の文法的な側面及び活用語のすべての語形を扱う形態論と、すべての文の文法的な側面を扱う文論(狭い意味での構文論)と同じように、連語論もすべてのタイプの連語を扱ってよい」と主張した。以上の図はその主張を背景にするものであると断っておきたい。文法論における連語論の位置づけについて、詳しくは彭(2004a：1－18)を参照されたい。

① むすびつき様式の違いに基づいて、連語を類別化しつつ体系的に分析・記述する；
② 個々の連語における主導語・従属語のカテゴリカルな意味特徴を考察する；
③ むすびつき間の関連、及び移行の条件を明らかにする；
④ Paradigmatic Relationの視点から類義関係にある連語を考察する。

1.2 先行研究の流れについての概観

本節では、現代日本語の形容詞的な連語に関する先行研究について概観する。

1.2.1 現代日本語の形容詞についての研究

本研究は、形容詞的連語についての研究であるため、まず形容詞について、これ迄どのような研究が蓄積されてきたかを振り返ってみる必要性がある。近年の形容詞研究については、大きく分けると、３つの流れがあるように思われる。

(a) 品詞体系における形容詞の位置づけ

形容詞を動詞、名詞との関連の中で捉え、形態論的な特徴、及び構文論的な特徴などに基づいて、品詞体系における形容詞の位置づけを見直す考察である。代表的なものは、村木(1998、2002)の「第三形容詞」に関する論考や、上原(2002)、小林(2005)などのいわゆる「形容動詞」の品詞分類を中心とする考察が挙げられる。

(b) 形容詞(文)の分類

今まで形容詞の分類に関わる文献は10点以上見られているが、大まかに、意味重視説と機能重視説とに分けることができる。前者は、西尾(1972)、仁田(1998)、森田(2002)などを代表とする語彙的な意味及び人称性・主観性に基づく分類説であり、後者には、荒(1989)、樋口(1996、2001a)、八亀(2001)、山岡(2000)などの事態と時間との関わり(「時間的限定性」)や、文機能などを重視した論考が挙げられる。

(c) 形容詞の構文的特徴・機能

形容詞を取り扱う特定の構文についての研究、たとえば、二重主語構文、比較構文、感情形容詞文などとして、西山(2003)、青山(1998)、町田(1998)、矢澤(1998)などが見られる。

以上挙げた諸文献は、形態論・統語論的な研究として位置づけられているものであり、本研究と直接に関わっていないため、文献名の列挙にとどめ、詳しい紹介については割愛する。

なお、工藤編(2007)は標準語の形容詞と方言の形容詞との対照言語学的なアプローチ、八亀(2008)は世界の諸言語における形容詞の類型論的アプローチとして、注目されている。

1.2.2 現代日本語における連語論の研究

従来の連語論研究は、連語の核である単語(主導語＝カザラレ)の品詞性及びそれと組み合わさった名詞(従属語＝カザリ)の格形式を基準に、研究対象の枠を設けるやり方で考察が重ねられてきた。単語と単語の組み合わせについての体系的な研究成果を以下の通りまとめておく。

(1) 動詞を核とする連語

- 名詞と動詞との組み合わせ

ヲ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/奥田靖雄[1])
ニ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/奥田靖雄)
デ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/奥田靖雄)
ヘ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/渡辺友左)
カラ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/渡辺義夫、荒正子)
マデ格の名詞＋動詞(言語学研究会編1983/井上拡子、荒正子)
ト格の名詞＋動詞(彭2002)

上述の研究は殆ど一つの名詞と動詞との組み合わせへの考察である。これまでの研究姿勢と異なり、鈴木(2011)は「ヲ格の名詞＋動詞」、「ニ格の名詞＋動詞」などにおいて別々に処理されていた「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」「うつしかえのむすびつき」を実現させた連語について、「～に～を～する」「～から～を～する」

1 言語学研究会編(1983)(『日本語文法・連語論(資料編)』)は従来から連語論研究の指針となる論考である。本研究もこの著作に多く学んでいる。

「～を～から：に／へ／まで～する」のような構造的なタイプとして、3単語(以上)の連語を取り上げて記述している[1]。

- 副詞と動詞との組み合わせ(新川1979)

（2）名詞を核とする連語

- 名詞と名詞との組み合わせ

ノ格の名詞＋名詞(鈴木1978～1979、彭1992、中野2004a・2004b、鈴木2006・2011)

カラノ格の名詞＋名詞(彭1993)

トノ格の名詞＋名詞(彭1995)

デノ格の名詞＋名詞(彭1996b)

マデノ格の名詞＋名詞(彭1998a)

ヘノ格の名詞＋名詞(彭1998b)

名詞カラ＋名詞ヘノ＋名詞(彭1996a)

複合連体格の名詞＋名詞(彭1999)

- 動詞と名詞との組み合わせ(髙橋1994)
- 形容詞と名詞との組み合わせ(宮島1995、鈴木2011)

（3）形容詞を核とする連語

- 名詞と形容詞との組み合わせ

ガ格の名詞＋形容詞(根本1965)[2]

ニ格の名詞＋形容詞(まつもと1979、荒1992)

ト格の名詞＋形容詞(荒1992)

デ格の名詞＋形容詞(荒1992)

カラ格の名詞＋形容詞(荒1992)

上掲のように、名詞と形容詞の組み合わせとして、(3)に挙がっているもののうち、まつもと(1979)は「ニ格の名詞＋形容詞」形式の連語を幅広く取り上げ、緻密な分析・考察を施しており、大変有益な論考である。荒(1992)は、言語学研究会合宿における発表のレジュメであり、ニ

1　鈴木(2011)は動詞の連語、名詞の連語への記述のみならず、連語論研究の経緯、これからの課題なども詳しく紹介し、連語論の集大成を目指した貴重な著作だと言えよう。

2　1.3.2.2で述べた通り、ガ格についての考察は従来の連語論のやり方では対象外とされているためか、根本(1965)は研究史上においてそれほど重要視されていないようである。

格については、まつもと(1979)を踏まえ、ある程度詳しい記述が行われているが、ところどころ疑問点を残したままであり、完全な原稿とは言いがたい状態にある。ト格、デ格、カラ格については、簡単なメモで終わっており、記述の準備段階と言わざるを得ない。荒(1992)は「名詞と形容詞との組み合わせ」について、唯一体系的な試みには見えるが、残念なことに、未刊のままでいる。

以上に示したように、従来の連語論研究は、殆ど名詞と動詞との組み合わせや、名詞と名詞との組み合わせを中心に展開されてきたものである。形容詞の場合、動詞、名詞と並んで三大品詞といわれながら、動詞的連語、名詞的連語と比較すれば、随分立ち遅れていることは否めない。動詞的連語・名詞的連語は、ある程度詳しく記述された故、それなりに全体像が見えてきた一方、形容詞的な連語についての体系的な研究は未だに見られていないと言っても過言ではなかろう。

1.2.3 現代日本語における格の研究

連語論研究は、連語の核になる「カザラレ」の格支配問題をも視野に入れているものであり、この点では、格の研究と関連性を持っている。以下、現代日本語における格の研究を大雑把に見ていきたい。

結合価、意味役割などについて、これまでかなり膨大な研究成果が蓄積されてきたが、全体から見れば、連語論研究と同じく、動詞を中心に展開されていると伺われる。動詞と比べれば、ガ格以外の名詞と共起できる形容詞は、数としてはそれほど多くないし、形容詞の支配を受ける名詞の意味役割(深層格)も、動詞の場合ほどバラエティーに富んでいないと認められる。しかし、動詞と異なる事象を表す形容詞が、語彙的な意味や格支配の面において、独自の特徴を持っているのは今更言うまでもないことである。したがって、動詞文における格の研究を以って、形容詞文をカバーしようとしてもしきれいない部分があると思われる。ところが、現状としては、格についての研究は、動詞一辺倒であり、形容詞の結合価、形容詞と共起する項の意味役割に焦点を当てる研究は、動詞と比べれば目立って少ないのである。次に、形容詞の格支配に関連する主な研究成果を概観しておく。

● 用言全般の格支配についての論考[1]

石綿、荻野(1983)「日本語用言の結合価」

木村(1997)『日本語における表層格と深層格の対応関係』

石綿(1999)『現代言語理論と格』

以上３点は、用言全般を取り上げるものであり、その中で形容詞にも触れている。１点目の石綿、荻野(1983)は結合価文法の枠組みにおける表層格についての研究で、残りの２点は格文法を土台にする深層格および表層格との対応関係への考察である。その内、石綿(1999)は日本語教育などで用いる「動態述語」と「状態述語」の分け方に従い、用言の統語構造を用いて述語になる語彙の分類を行っている。「状態述語」の部分では、数多くの形容詞を取り上げ、意味M(meaning)と表現E(expression)というME構造を記述している[2]。

● 専ら形容詞の格支配についての論考

仁田(1975)「形容詞の結合価」

小矢野(1980)「『に格』をとる形容詞文について」

小矢野(1985)「形容詞のとる格」[3]

仁田(1975)は結合価文法の角度から、形容詞への分類・記述の試みである。小矢野(1980)では形容詞と共起するニ格名詞の意味・用法につ

1 動詞を中心に取り上げる文献として、森山(1988)、村木(1991)が見られる。このほか、計量言語学、自然言語処理などの分野における成果として、池原他(1997)、荻野他(2003)などの一連の研究が挙げられる。

2 石綿(1999)で記述した形容詞は、あわせて102語であり、その内、重複して出現したのは３語ある。

3 小矢野の研究、特に小矢野(1985)は、名詞と形容詞の間にできている「むすびつき」を分析しているものとして連語論研究に近い一面を持っていると見られる。ただし、「格」と「むすびつき」という連語論研究において極めて重要な概念の捉え方について、連語論研究からずれているところも見せている。たとえば、連語論研究的な捉え方について言えば、「格」とは「名詞の形態論的な曲用で、文法カテゴリーのひとつ」であり、「むすびつき」とは「カザリとカザラレとの間の意味上の関係」である。それに対して、小矢野の研究では、「格は典型的には名詞と動詞との組み合わせの中に認められる意味論的かつ統語論的なむすびつきである」(小矢野1985)のように、格をむすびつきそのものとして捉えている。さらに、小矢野(1985)において、「むすびつき」を「必須のむすびつき」と「任意のむすびつき」に分け、このような捉え方も「必須格」「任意格」のような結合価文法・格文法の影響を受けているからのではないかと推定される。よって、本研究では、小矢野の研究を連語論研究ではなく、格の研究と見ておく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com